

引き継がれる母性、なくなる資産

インドネシアのイスラム恋愛映画の展開、2008～2017年

山本 博之

2017年12月、待望された『愛の章2』がインドネシアで劇場公開された。この前作である『愛の章』(2008年)は今日に至るイスラム恋愛映画の流行をインドネシアにもたらした記念碑的な作品である¹⁾。劇場公開だけで368万人の観客を動員し、公開当時、ジャンルを問わずインドネシアで制作・公開された映画で最も観客動員数が高い作品となった。首位の座は同年公開の『虹の兵士たち』(472万人)に抜かれて短命だったが、『愛の章』は2017年末の時点でも歴代6位を維持している。

その続編である『愛の章2』は、この10年間で種々の花が一斉に咲き開いた感があるイスラム恋愛映画を総括する作品になるものと期待されていたが、物語の展開には違和感を抱いた観客も少なくなかったようだ。多国籍・多民族であるはずの登場人物がすべて流暢なインドネシア語を話すことへの違和感ではない。それは『愛の章』以来のイスラム恋愛映画の決まりごとであり、いまさら驚くようなことではないためだ。

違和感のものは、主人公ファハリが汲めども尽きないほどの資産家であること、そしてファハリの妻フルヤが死を前に託した仰天する願いがかなえられたことだ。困った人を見ると放っておけない善人のファハリは人助けのために身銭を切る。行き場がなく困っている見知らぬ女性を家に迎え入れて住み込みの仕事を与え、車を壊して気が済むならいくらかでも壊せばいいと言って自分に逆恨みする自動車荒らしを見逃し、隣家の少年に自分が経営するミニマートの商品をいつでも好きなだけ代金を払わずに持って行っていいと告げ、父親を失って経済的に余裕がなくなった隣家の娘に匿名でバイオリンの講師を派遣してレッスンを続けさせ、そして息子に自宅を売られて住む家がなくなった近隣の女性のためにその家を買戻す。いっ

たいファハリはどれだけ資産を持っているのか。また、自らの死を前にしたフルヤは生まれたばかりの息子が母親なしになることを心配して、住み込みで働くサビナにファハリの妻となって自分の息子を育ててほしいと頼み、さらに自分の死後にサビナに自分の顔を移植してフルヤの顔で生きていってほしいと願う。この2つはどちらも荒唐無稽に聞こえるが、それを『愛の章』以来のイスラム恋愛映画が思考実験としての性格をもって展開してきたことの帰結として理解することが本稿の試みである。

『愛の章2』は、『愛の章』で結婚したファハリとアイシャのその後の物語が描かれ、また、『愛の章』でファハリ役を演じたフェディ・ヌリル(Fedi Nuril)がファハリ役で出演しており、物語の上では『愛の章』に直接つながる続編である。ただし制作に目を向けるならば、『愛の章2』は『愛の章』の直接の続編ではなく、『愛の章』を契機に生じたイスラム恋愛映画どうしの競合の上に位置付けられる。

『愛の章』の公開以来、インドネシアのイスラム恋愛映画の発展はインドネシア内外の人々の関心を集め、その背景や意味が考察されてきた。西芳実は、とりわけ2001年以降、自身が望むか否かにかかわらずイスラム教徒であることが他者に何らかの意味を持って受け止められる状況が強まっており、そのことを自覚した上でイスラム教の積極的な価値をインドネシアから世界に発信する試みとしてイスラム恋愛映画を捉える[西2013]。また、アリエル・ヘルヤントは小説版(原作者)と映画版(監督)を分けて捉えることで、映画版『愛の章』のヒットの背景には小説版『愛の章』が持っていたイスラム性が薄められたことにあると論じる[Heryanto 2014]²⁾。本稿はこれらの研究を踏

1) これ以前にイスラム恋愛映画と呼べるものがまったくなかったわけではないが、ジャンルとして確立していなかった。[松野1995]はインドネシア映画をジャンル別に詳細に紹介しているが、1995年発表のこの文章にイスラム恋愛映画は含まれていない。2006年発表の[上野2006]でもイスラム恋愛映画はジャンルとして確立していない。

2) [福島2008]はインドネシアでの公開当時の様子を紹介し、小説版と映画版の違いに注意を喚起している。[野中2013]の主な関心はイスラム的小説の台頭にあり、小説版と映画版の差異にはあまり関心を持っていない。[見市2014]は世俗と宗教(イスラム教)の市場が融合しているという立論のため、イスラム教映画を一括りにして捉えている。デビッド・ハナンはインドネシア(ジャワ)のイスラム化の進捗と結び付けて捉え

まえ、インドネシアのイスラム恋愛映画が持つ思考実験としての側面に注目して、この10年間の主要なイスラム恋愛映画の競合関係を系譜で捉え、それを通じて観客が違和感を抱いた『愛の章2』の展開について考えてみたい³⁾。

本稿の議論を大まかに先取りすると以下ようになる。『愛の章』は復古主義的なイスラム像を支持する原作者とそれを換骨奪胎して西洋近代的な価値に基づいて映画を作ろうとした監督の呉越同舟的な作品だった。監督側と原作者側の競合を通じて、結婚とりわけ一夫多妻の是非がイスラム恋愛映画のテーマになった。さらに近代主義的な考え方に基づく別の原作者による小説の映画化を通じて、イスラム教やイスラム教徒に向けられた敵意に愛情で報いるという要素が加わった。『愛の章2』の物語はこれらの考え方や態度を極端に推し進めた結果として理解することが可能である。

1. 『愛の章』——イスラム恋愛映画のはじまり

小説版『愛の章』(2004年)の著者であるハビブラマン・シラジ(Habiburrahman El Shirazy)は、中部ジャワ出身で生まれ、エジプトのアズハル大学で学び、自らの学生時代の経験をもとに、イスラム教の発展に寄与することを目的としてこの小説を執筆した⁴⁾。

小説版がベストセラーになると、インドネシア最大のテレビドラマ配給会社であるMDエンタテインメントの経営者でインド系インドネシア人のマノイ・パンジャビ(Manoj Punjabi)が映画化に乗り出し、映画監督のハヌン・ブラマンチョ(Hanung Bramantyo)に話を持ち掛けた。ブラマンチョはイスラム教徒であるが宗教小説や宗教映画には興味がなく、小説版のイスラム色の強さに辟易して最後まで読み通せなかったという。パンジャビは時間をかけてブラマンチョを説得し、ブラマンチョは小説版のイスラム色を薄めること

を条件に映画化に関わることにした。

ブラマンチョとパンジャビの意向を知らないシラジは中東風のガウンを纏って立派なひげを蓄えた男性イスラム教徒をファハリ役に推薦したが、ブラマンチョが主役を選んだのはフェディ・ヌリルだった。フェディ・ヌリルは初出演作品の『ガレージ』で妻でない女性とのキスシーンを演じており、この配役が発表されるとシラジと小説版のファンたちを大いに失望させた。

フェディ・ヌリルを主役にしたのはイスラム色を薄めようとするブラマンチョの意図的な選択だった。映画版のファハリは中東のイスラム教徒を思わせるガウンではなく西洋風のカジュアルな服を着て、男性イスラム教徒のたしなみともいえる髭をきれいに剃り落とし、流行の髪型をした青年となった。結婚式はパンジャビの希望でボリウッド映画のような豪華絢爛さで、そこにファハリは洋服にネクタイ着用で臨んだ。また、ファハリは彼を取り巻く女性たちに対して指導的な態度で臨む強い男性としてではなく、彼女たちに支えられる受け身で弱々しい存在として描かれた。

『愛の章』の物語は、ファハリ、マリア、アイシャの3人をめぐって展開する。エジプトのアズハル大学で学ぶインドネシア人学生のファハリは、勉学に熱心で宗教の知識と理解も十分にあり、すべての人に優しく、そのため女性たちに人気が高い。しかしファハリは女性の気持ちがあったくわからず、伴侶は神が与えてくれるはずだと信じている。

ファハリと同じアパートに住むコプト教徒のマリアは、さほど裕福でない家庭で育ち、イスラム教徒ではないがコーラン(クルアーン)の章句が暗誦できるほどイスラム教に関心と知識を持っている。マリアはファハリに好意を抱いている様子で、大学のレポートで困っているファハリを進んで手伝ったりする。

ファハリはあるとき、電車の中でエジプト人男性がアメリカ人女性に「アメリカ人はムスリムをテロリスト扱いしている」などと難癖をつけているのを目撃して、アッラーはすべての人間を平等に扱うように命じているというコーランの章句を引用してエジプト人男性をたしなめる。トルコ系イスラム教徒でドイツ国籍のアイシャがその場に居合わせてファハリに関心を持ち、人づてにファハリを紹介してもらう。アイシャは家柄がよく裕福で、ふだんはバールを被っていて目しか見せないが美貌の持ち主であり、一目惚れしたファハリはアイシャと結婚する。

ようとするが具体的な議論はない[Hanan 2017]。アリシア・イズハルッディンは『愛の章』をイスラム的な映画だと論じている[Izharuddin 2017]が、これは複数の宗教を対等に扱うのではなくイスラム教を上位に置いているという意味であり、この作品を観たインドネシアの観客がイスラム性が薄いと見たことと矛盾しない。

3) 本稿では、別に示さない限り、制作背景については[Haryadi 2008]および[Heryanto 2014]を参照している。インドネシアのイスラム恋愛映画については、本稿で扱っていないものも含め、友成純一が内容を詳細に紹介しており参考になる[友成2017a; 2017b; 2018]。友成の紹介はそれ自体が読み応えのある作品にもなっている。

4) 小説版については[野中 2013]を参照。

映画版では物語も一部改変された。最も大きな変更点は、小説版には書かれていないファハリたちの一夫多妻の日常生活が入れられたことだった。

アイシャと結婚するとマリアや他の女性たちがそっけない態度を取るようになるが、ファハリにはその理由がわからない。ファハリが自分以外の女性を選んだことを逆恨みしたノウラの策略でファハリは強姦容疑で逮捕され、投獄される。アイシャはファハリの容疑を晴らすためにファハリの知り合いを訪ねてまわり、それを通じてファハリのことを知っていく。

ファハリの無罪を証明できる唯一の証人であるマリアは交通事故に遭って昏睡状態だった。マリアがファハリに想いを寄せていたことを知ったアイシャの勧めで、ファハリは昏睡状態のマリアを第二夫人とし、目を覚ますようマリアに呼びかける。目覚めたマリアの証言でファハリは無罪を勝ち取り、3人はアイシャの豪華なマンションで暮らし始める。

物語の中盤では、3人がそれぞれ一夫多妻状況に悩んで解決をはかろうとする様子がコミカルに描かれる。アイシャとマリアの両方から「今夜は私の部屋で寝て」と誘われ、困ったファハリが1人で居間のソファで寝る場面などがあり、インドネシアでの劇場公開時には観客の笑いを誘っていた。

3人の生活はようやく軌道に乗ったかに見えたが、マリアは体が弱く、命の炎が消えかかっていた。病床のマリアは朦朧とした意識の中で見たものをファハリとアイシャに語る。光に満ちた荘厳な御殿の入り口に立つと、そこが天国の入り口だと知らされる。入ろうとするが門番に止められて入れない。マリアがコーランの章句を詠むと扉が開いてマリヤムが出てくる。マリヤムは、天国は誰でも入れるが入るために必要なことがあり、それはアッラーの使徒であるムハンマドを通じて人間に伝えてあるという。マリアは、コーランを読んでムハンマドの教えは知っているが、それを実践してこなかったのがこのままでは天国に入れないと知る。マリヤムとは聖母マリアのイスラム教での呼び方である。天国に入る方法はムハンマドが伝えた言葉に従うことだと聖母マリアが告げたということは、宗教は分かれていても天国は1つしかないことを意味している。したがってマリアは天国に入れないければファハリと天国で会うことができない。意識が戻ったマリアは命が尽きる前にイスラム教に改宗することを望み、ファハリの立会いのもと、最後の力を振り絞ってイスラム教徒としての信仰を告白して命を引

き取る。

映画版はシラジと小説版のファンを大いに失望させたが、結果として誰もが予想しなかったほどの大ヒットとなった。劇場に足を運んだ観客の多くは、小説版を読んだことがなかったか、読んだけどあまり魅力を感じなかった人たちだったという。映画版は一見するといかにもイスラム教的世界を映し出したようでありながら、インドネシアの観客の目には、西洋式の生活様式に慣れ親しんできた自分たちの価値観を揺るがす脅威にならないものと映った。いわばイスラム性が薄いものとして歓迎されたのである。

また、インドネシア人学生であるファハリがコーランの章句を引用してエジプト人をたしなめていることに象徴されるように、イスラム教に関することは「本場」である中東アラブ世界からインドネシアにもたらされるという従来の認識に対し、学問を修めさえすればインドネシア人であってもエジプト人に神の道を教えることができるという考え方を示すものでもあった。この映画を観たユドヨノ大統領(当時)が中東アラブ諸国の大使たちを招いた上映会を開いたことは、インドネシアから(イスラム)世界に発信できるようになったという喜びをよく表している。

ブラマンチョが一夫多妻の日常生活の場面を含めたのは、それをコミカルに描くことで一夫多妻が現実的でないことを示し、原作が醸し出すイスラム化の傾向に歯止めをかける意図があったためだった。一夫多妻はイスラム教の教えとして認められており、イスラム教徒として制度としての一夫多妻を認めない言うことはできない。ただし一夫多妻が認められるのは実現可能である場合のみとされていることから、実現可能ではないと示すことが、制度としての一夫多妻を認めた上で実践としての一夫多妻状況を認めないということになる。

しかしブラマンチョの意図に反し、『愛の章』は一夫多妻を推奨していると受け止める人も多かった。このため映画版およびブラマンチョは、原作者と小説のファンからは原作のイスラム教的世界観を貶めたと批判され、女性イスラム教徒たちからは一夫多妻を推奨して女性を貶める描き方をしたと批判された。

2.『ターバンを巻いた女』——自己決定する女

『愛の章』の興業が成功すると、シラジの別のベストセラー小説である『愛が祝福されるとき』(2007年)に

映画化の目が向けられた。ただしシラジとブラマン
チョの協働が実現することはなく、かわりにブラマン
チョが選んだのは女性イスラム教徒でフェミニスト
のアビダ・ハイレキ(Abidah El Khaleqy)による小説
『ターバンを巻いた女』(2001年)の映画化だった。ブラ
マンチョは制作にあたり、『愛の章』が一夫多妻を好意
的に取り上げて女性を貶めたと感じた全ての女性に
対する贖罪の意味を込めてこの映画を作ると語った。

『ターバンを巻いた女』の主人公アンニサは、芯が強く賢い女性だが、ジャワの田舎のプサントレン(イスラム寄宿塾)の塾長の娘として生まれたばかりに、「女が勉強なんかしてどうなる、結婚して子どもを産んでいい妻といい母になるのが女の務めだ」という父親や他の先生たちに怒られ続ける。授業で先生が「妻は夫の要求にどう応えるべきか」という話ばかりするので、先生に「夫は妻の要求にどう応えるべきですか」と質問すると、「妻の要求と口にするとは淫らな女だ」と怒られる。アンニサは町や外国での進学を断たれ、寄宿塾の発展のため、自分の意志と無関係に、金持ちだが素行の悪い男性と結婚させられてしまう。

『ターバンを巻いた女』は、インドネシアの伝統的なイスラム寄宿塾を舞台とし、主人公が想いを寄せる1人を除いて、登場する男性イスラム教徒に合理的で冷静な人が1人もいない。それに対してアンニサは、身体を含めて自分の運命を自分で決められる女性として描かれている。望まない男性と結婚させられるが、かつての恋人が留学から戻ると2人きりの場で自らスカーフを外して抱擁を求める。その現場に夫と村人たちに踏み込まれ、姦通罪で恋人とともに投石で死罪になるところを、アンニサの母親の「このなかで姦通したことがないもののみ石を投げなさい」という言葉でアンニサは命を取り留める。ラストシーンでは、女は乗馬を習わなくてよいと言われていたアンニサが、男性イスラム教徒の象徴であるターバンを投げ捨て、馬に乗って去っていく。

また、イスラム教とは関係ないが、この作品の性格を伝えるものとして特筆すべきなのは、アンニサが心のよりどころとしてプラムディヤ・アナンタ・トゥール(Pramoedya Ananta Toer)の小説を読んでいることである。プラムディヤは政治犯としての流刑先で執筆したブル島4部作などで知られるインドネシアの国民的な作家である。その著作は国外では早くから高い評価を受けていたが、スハルト体制下のインドネシアでは発禁とされていた。1980年代初頭には、プラム

ディヤの小説を所持していたために学生が有罪になり、本が没収されて焼却される事件も起こっていた。1998年のスハルト体制崩壊からわずか3年後に書かれた小説を原作とするこの映画は、プラムディヤの本が一般の劇場でスクリーンに大寫しになった記念すべき作品となった。このためブラマンチョは左翼監督と批判され、ある批評家はカール・マルクスをもじって「カール・ブラマンチョ」と呼んだ。

『ターバンを巻いた女』で、アンニサは、寄宿塾の女生徒たちの助けになればと思い、自分がこっそり読んでいた本をコピーして渡し、女生徒たちがまわし読みする。これが先生たちの知るところになり、危険思想の本を読ませるとはなにごとだと怒った先生たちは本を集めて焼いてしまう。まわし読みされた本は何種類かあるが、表紙が何度も画面に映されたのはプラムディヤの『人間の大地』とエリ・ヴィーゼルの『夜』の2冊だった。劇中の時間は1997年のスハルト体制末期で、プラムディヤの小説はまだ発禁対象である。イスラム寄宿塾の抑圧に抵抗してまわし読みされたのがインドネシア・ナショナリズムとユダヤ人収容所の話であるのは興味深い。『人間の大地』はプラムディヤが監獄で書いた物語で、『夜』が収容所に関する物語であることから、ジャワの農村社会でイスラム寄宿塾が(女性にとって)監獄や収容所と同じような働きをしているというメッセージが間接的に伝わってくる。

アンニサを通じて女性の自己決定を肯定した『ターバンを巻いた女』は、そのテーマをわかりやすく描こうとしたため、プサントレンおよびそれに象徴されるインドネシア(とりわけジャワ)のイスラム教の伝統主義的な側面が過度に強調された。その意味で、結果としてこの作品はプサントレンの「磁場」から十分に抜け切れていないと言える。

『ターバンを巻いた女』は『愛の章』よりもさらに大きな反発を招いた。インドネシア・ウラマー評議会(MUI)のアリ・ムスタファ・ヤクブ(Ali Mustafa Yaqub)はこの映画を見ないようにとボイコットを呼びかけた。これに対してこの作品を支持するフェミニストのグループは、インドネシアの女性解放のシンボルであるカルティニ(Raden Adjeng Kartini)に重ねてこの作品を「プサントレンのカルティニ」と評し、劇場に行くことでボイコット運動に対抗しようと呼びかけた。

3.『愛が祝福されるとき』——祝福という束縛

映画版『愛が祝福されるとき』の制作準備は『ターバンを巻いた女』に対する批判と失望が渦巻く最中に進められた。制作に関わったスタッフたちは、ブラマンチョが『ターバンを巻いた女』で犯した誤りをこの作品を通じて正すと公言していた。

『愛の章』で犯した失敗を繰り返さないように、シラジは『愛が祝福されるとき』の制作に積極的に関わった。監督には1970年代～1980年代にイスラム的な要素を入れた映画を撮っていたハエルル・ウマム(Chaerul Umam)を招き、俳優にはイスラム指導者の役で知られる俳優・監督のデディ・ミズワル(Deddy Mizwar)らを迎えた。キャスティングでは俳優のコーラン読誦能力を確認し、演技では婚姻関係にない役者どうしの身体が触れ合わないなどの配慮を十分に行った。

中部ジャワの田舎町出身のアザムはエジプト・カイロのアズハル大学で学んでいる。成績は優秀だが、留学してすぐに父が亡くなり、母親と3人の妹たちに仕送りするため、カイロの市場で食材を仕入れてテンペ(大豆の発酵食品)とバソ(肉団子)を作って売っている。料理の腕がよいのでお得意さんも多く、インドネシア大使の娘で女優のエリアナもその1人だった。フランス留学経験があつて白人の恋人がいたこともあるエリアナは開放的で、料理へのお礼にキスしてあげるとアザムに言うが、結婚していない男女の接触をよしとしないアザムは不機嫌になり、エリアナにはそれが理解できない。

大使館で運転手を長く勤めるアリは、エリアナとは釣り合わないからやめておけとアザムに忠告し、かわりにキヤイ(宗教教師)の娘でアズハル大学の修士課程で学んでいるアナのような女性がアザムにふさわしいと勧める。しかしアザムはテンペとバソを売っている自分はキヤイのお嬢さんと釣り合わないと考えてしまう。

アザムの旧友フルカンは裕福な家庭に育って勉強に集中でき、修士号取得の口述試問を目前に控えている。アザムとフルカンは、エリアナは英語もフランス語もできるしインドネシアのテレビドラマにも出ているのでうまく取り込むことができれば宣教の助けになると考えている。アザムはエリアナにはフルカンを釣り合うと思っているが、フルカンはすでにアナに求婚していた。それを知らずにカイロにいるアナの叔

父にアザムが求婚の相談に行くと、叔父は、修士号取得を目前にしているアナの夫にはアナと同等かそれ以上の学問が必要で、ろくに勉強もせずテンペとバソを売っているアザムはふさわしくないと断る。

アザムはバスで乗り合わせたインドネシア人女子学生が財布を無くして困っていたのを助ける。居合わせたアナはアザムのことが気に入り、別れ際にアザムの名前を聞くが、アザムはとっさにアブドゥッラーと答えてしまう。アザムもアナが気に入り、名前を尋ねなかったことを悔やむ。アザムは大学で女子学生の講演を聞きに行き、バスで乗り合わせた女性がアナだったことを知る。

アナはジャワに戻って友人フスナの出版記念講演会に参加する。フスナはアザムの妹で、兄がカイロで勉強しているという話になるが、名前が違うのでアザムがアブドゥッラーのことだと気付かない。アナは両親から早く結婚するようにと急かされている。アナはアブドゥッラーのような男性と結婚したいと思っているが、すでに6件の縁談を断っており、世間体が悪くなるのでこれ以上縁談を断ることはできないという両親に決断を迫られ、フルカンの求婚を受け入れる。

フルカンは修士号の口述試験の直前にカイロ市内の高級ホテルに宿泊し、犯罪団の一味であるイスラエル人女性に目を付けられる。意識を失って翌朝目が覚めるとホテルの部屋に全裸で寝ており、大金を払わないとイスラエル人女性との破廉恥な写真をインターネットで公開すると脅迫される。エジプト警察の働きでイスラエル人女性は逮捕されたが、この過程でフルカンはHIVウイルスに感染していることがわかり、その秘密を守る代わりに直ちにエジプトから出国するようにと警察に命じられる。

婚約のためアナとフルカンの両方の家族が集まった場で、アナはフルカンに結婚のための2つの条件を出す。それは、結婚後もジャワに留まってこのブサントレンで暮らすこと、そして自分が生きて妻としての役割を果たしている限りは第二夫人をとらないことだった。一夫多妻を否定するのかと尋ねるフルカンに対し、フルカンが4人まで妻をとることに反対しないが、自分はその1人にはならないということで、一夫多妻を否定しているわけではないと答える。妻が結婚の条件を出すことを認める根拠となる本をアナが示し、フルカンは条件を受け入れ、アナとフルカンは婚約する。

アザムもようやくアズハル大学を卒業し、9年ぶり

にインドネシアに戻る。ちょうど次回作の撮影のためインドネシアに戻る予定だったエリアナと同じ飛行機になり、機内で話がしたいからとエリアナの手配でアザムもビジネスクラスに乗り、ジャカルタの空港に着くと2人で並んで飛行機から出てくる。記者たちがエリアナ取材し、隣にいるアザムは恋人であるかのように見える。

『愛が祝福されるとき』の物語はここで終わり、その続きは『愛が祝福されるとき2』で展開する。『愛が祝福されるとき2』で、アザムはジャワの実家に戻って9年ぶりに母と妹たちと再会する。そこから14キロ離れた村にある実家に戻っていたアナは、2週間後に結婚することを伝えにフスナの家を訪ねる。フスナの兄として紹介されたアザムの顔を見て、カイロで会って密かに想いを寄せていたアブドゥッラーだと気付く。アザムとアナは互いに密かに相手に想いを寄せているが、アナの結婚が決まった以上、それを口に出しても何にもならない。2週間後、アナはアザムたちが祝福するなかでフルカンと結婚する。他方でアザムにも結婚相手の候補が次々と紹介されていき、アザムはその1人と婚約する。物語はアナとアザムが結ばれるのか、結ばれるとしたらどのように結ばれるのかに観客の関心が集まるが、その展開と結末は実際に作品を見ていただくことにしよう。

『愛が祝福されるとき』の前半はカイロが舞台だが、中盤からジャワの話が増えていき、『愛が祝福されるとき2』は全編がジャワで展開する。互いに相手のことが好きだと思っているアナとアザムが結ばれるのを妨げるのはジャワの田舎の慣習であり、世間体を気にする両親たちである。

アナの父親ルトフィはジャワでプサントレンを開くキヤイである。アナは求婚者を選ぶ権利が認められており、実際に求婚者を何人か拒否しているが、拒否し続けると世間体が悪いという理由で両親から結婚相手を決めるように急かされ、ほとんど名前しか知らない人の中から結婚相手を選ばされる。

帰国したアザムがエジプトから輸入した物資をトラックでジャワの村々に配送する仕事を始めると、それはエジプトで大学を卒業した男がする仕事ではないという村の噂が立ち、アザムの母はまっとうな職に就くようにアザムに求める。バソ・チンタ(ハート形のバソ)を出す屋台を高校の前に出して繁盛すると、アザムの母は早く身をかためるようにとアザムに求める。しかし妹たちがアザムの結婚相手を探しても、家

に泊まりに来たときに夜明けの礼拝の後で二度寝して朝7時になって起きてきたような怠け者はよい妻にならないとか、アザムは第一子なので結婚相手も第一子でないと親が死ぬという言い伝えがあるからだめだとか、母親たちの注文が多くて結婚相手が決まらない。

物語が展開するのはプサントレンを主宰するキヤイの権威が支える社会である。そこではエジプトに代表される中東アラブ世界からもたらされるイスラム教の教えや物品が村々に届けられ、中東アラブ世界がイスラム教の「本場」で、そこからもたらされる教えや物品をありがたくいただくという構図になっている。ルトフィが開くプサントレンでアザムがルトフィにかかわって説法する機会があり、それを聞いたアナが、現在の暮らしに合致した例をたくさん入れてくれるので父の説法よりも魅力的だと語る場面もある。しかし、これは若者学士によるキヤイの権威への挑戦としてではなく、エジプトの新しい考え方を受け入れることでキヤイが教え導くプサントレンの権威がさらに高まるという構図で語られる。

タイトルは言葉を補えば「愛が神によって祝福されるとき」という意味である。人が祝福を与えようとすると束縛にもなりうる。『愛が祝福されるとき』は、『ターバンを巻いた女』に対抗した結果として、『ターバンを巻いた女』と反対の方向を向きながらも、プサントレンの「磁場」に取り込まれる様子が強調される結果となっている。

4.『望まれざる天国』—— ジャワから海外へ

『愛の章』の成功以降、多くのイスラム恋愛映画が作られてジャンルが細分化していった。その1つに、ジルバブ(スカーフ)を被った女性イスラム教徒が外国を訪れ、異国情緒・異文化の中で恋愛や信仰について考えを深めていくジルバブ・トラベラーものがある。舞台を海外に移して女性を主役に据えることで、『ターバンを巻いた女』や『愛が祝福されるとき』が囚われていたジャワのプサントレンの「磁場」から抜け出し、より幅広い内容の思考実験を行うことが可能になる。

アチェ出身でイスラム教に関する作家を祖父に持つアスマ・ナディア(Asma Nadia)は、『望まれざる天国』(2007年、2015年映画化)や『アサラムアライクム 北京』(2013年、2014年映画化)などの小説を多く

発表してジルバブ・トラベラーものの確立に寄与した。パンジャビが映画化を進め、2015年にクンツ・アグス(Kuntz Agus)監督により『望まれざる天国』が映画化された。ブラマンチョはこの作品に副プロデューサーとして参加し、2017年公開の続編である『望まれざる天国2』で監督を務めた。

『望まれざる天国』の舞台はジャワ島中部のジョグジャカルタである。ソロ出身の建築家プラスは幼い頃に母親が自分の目の前で自殺したのを止められなかったことがトラウマになっており、他人の不幸を見ることができない。ジョグジャカルタ出身で自作の物語を人形芝居にして子どもたちにイスラム教を教えているアリニと出会い、2人は結婚して娘のナディアが生まれる。

困った人を見ると放っておけないプラスは、目の前で起こった交通事故で重傷を負った女性メイを病院に担ぎ込む。妊娠していたメイは男の子アクバルを出産するものの、自分の人生を悔いて自殺しようとする。プラスはメイの自殺を食い止めるため、君の人生には僕が責任を持つ、その証として君と結婚する、と説得し、2人は病室で結婚する。

プラスは突然第二夫人と赤ちゃんを抱えることになったが、愛するのは妻のアリニと娘ナディアだけだという気持ちは些かも揺るがない。しかし、アリニの父が心臓発作で亡くなったことをきっかけに父に15年来の第二夫人とその娘がいたことを知って父の不誠実を嘆き怒るアリニの姿を見て、プラスは自分に第二夫人ができたと言い出せなくなる。

プラスの友だちが一夫多妻について議論したりアリニの友だちが夫の浮気に悩んだりすることを通じて、劇中で一夫多妻の是非がさまざまな角度から議論される。一夫多妻に関わる章句をすべて暗唱できるほどコーランを十分に理解しているプラスは、自分はコーランに照らして適切な行動をとったと考えているが、唯一の愛する妻であるアリニに2人目の妻がいることを言いにくいと感じている。

プラスを演じたのは『愛の章』でファハリを演じたフェディ・ヌリルで、『愛の章』への出演以来、インドネシア映画の世界では誠実で敬虔な男性イスラム教徒の象徴のような存在である。この映画は、プラスにまず一夫多妻状況という現実を負わせた上で、どのような過程を経れば全ての当事者が一夫多妻状況を心理的に受け入れられるかをプラスに探らせている。コーランの章句や地元社会の慣習や時代の風潮や個人の考

え方などを考慮に入れていくと、ただでさえ狭い論理の道が曲がりくねって細く狭くなっていくが、それを何とか辿ってゴールに至る道筋を見つけようとする。

登場人物はみな誠実かつ敬虔で、親(とくに母親)なりに子どものことを最優先に考えて、それぞれが善意に基づいて合理的に判断して行動しようとする。その結果、いったんはアリニを含めてすべての当事者が納得して一夫多妻状況を受け入れるが、最後にメイは息子をプラスとアリニに託して去っていく。メイとプラスの制度上の婚姻関係は解消されていないために制度上は一夫多妻状況が維持されたままだが、実態として1人の夫に2人の妻という形は解消されており、物語上は一夫多妻状況が現実には成り立たないことが示されている。メイが幼い息子をアリニたちに託して1人で去ることは無責任だという批判もあるが、経済的に自立して子どもを育てることができない状況で、子どもの世話を委ねることができる人がいるならば、まず自分が経済的に自立することを優先することは子どものことを考えた母親の判断だとする理解も成り立ちうる。

やや現実離れした設定にして登場人物に極端な考え方や行動を取らせているのは、この作品が思考実験でもあることの表われである。『望まれざる天国』は、制度としての一夫多妻を否定することはできないが、現代社会で一夫多妻状況は実現不可能だとする思考実験を商業映画として行っている。

その続編の『望まれざる天国2』では、イスラム社会に関する著作で売れっ子作家になったアリニが、東ヨーロッパに暮らすインドネシア人コミュニティでの出版広報のため、幼い娘ナディアを連れてハンガリーを訪れる。ブタペストに着いたアリニはメイと再会する。メイはアリニたちから息子アクバルを引き取り、ブタペストでアクバルと2人で暮らしていた。インドネシアで用事を済ませて駆け付けたプラスが合流すると、アクバルはプラスを父さんと呼び、プラスは居心地が悪そうにする。

講演や観光をして過ごしていたアリニが倒れて病院に運ばれる。癌が再発して脳に転移しており、このまま治療しなければアリニに残された日はほとんどない。しかしアリニは治療を拒否し、医師シャリフにそのことを誰にも伝えないようにと頼む。

メイは小さなブティックを構え、経済的に自立して生活していた。メイに惚れ込み、毎日のように会いに来て、君の過去に何があろうとも関係ない、これから

の人生と一緒に過ごしたいと求婚するのは、アリニを診察したシャリフだった。メイはシャリフの気持ちを受け入れたいが、そのためにはプラスと正式に離婚しなければならない。一方、アリニからメイと会ったと聞いていたプラスも、シャリフのことは知らないものの、ブタペストを訪れるこの機会にメイと正式に離婚した方がよいと考えて離婚手続きの準備を進めていた。

生死は神さまが決めることなので受け入れるが、幼いナディアにはまだ母親が必要だと考えるアリニは、プラスとメイに結婚を解消しないで一緒に暮らしてナディアを育ててほしいと求める。病気のことを知らないプラスとメイは戸惑うが、再びアリニが倒れて病院に運ばれ、プラスもメイも、そしてシャリフも事情を理解する。アリニの最後の望みでプラス、メイ、ナディアとベッドのアリニと一緒に礼拝し、礼拝が終わるとアリニは息を引き取る。

物語の最後の場面では、海が見える見晴らしのよい崖に結婚式の会場が設置されており、参列客が揃っている。ウェディングドレスのメイが入場すると、壇上でプラスとシャリフの2人が正装して花嫁を迎える。シャリフを演じるのは実に多彩な役を演じるインドネシアの人気俳優レザ・ラハディアンで、プラスを演じるのは『愛の章』で優柔不断な善人を演じたフェディ・ヌリルである。メイはどちらと結婚するのか。アリニの願いは荒唐無稽だと聞き捨てて恋人であるシャリフと結婚するのか、それとも、アリニの願いを聞き入れてプラスが結婚を解消せずにメイと一緒に暮らすのか。まさか、一夫多妻があるなら一妻多夫もあるはずだということで、メイがプラスとシャリフの2人と結婚するという結末はあるだろうか。さすがにそれは無茶だと思うかもしれないが、それが無茶だと思うなら逆の一夫多妻はなぜ無茶ではないのかと観客に考えさせるという理由なら、映画としてはそのような結末も考えられなくもない。

実際の結末は映画で確認していただくとして、結末がどうであろうとも考えられることをまとめておこう。アリニが死ぬということは、物語としては一夫多妻状況が実現しないことを意味している。もっとも、この作品で一夫多妻はテーマとしては後退しており、かわりに母の願いが前面に出てきている。幼い子どもを残して死んでいく母親が子どものことを思ってまわりの人たちに願うこと（ここでは夫が自分以外の女性を妻とすること）をして、まわりの人はその約束を果たそうとする。

5. 『ヨーロッパの空に輝く99の光』 —— 現代世界のイスラム教の課題を解く

ブラマンチョの『望まれざる天国』に対抗するかのよう、2013年に『ヨーロッパの空に輝く99の光』が、その翌年に続編がそれぞれ映画化された。『ヨーロッパの空に輝く99の光』は、ハヌム・ライス(Hanum Salsabiela Rais)とランガ・アルマヘンドラ(Rangga Almahendra)の夫妻による2011年刊行の同名の小説の映画化である。ハヌム・ライスはインドネシアの近代主義的なイスラム大衆組織ムマハディアの総裁を務めたアミン・ライス(Amien Rais)の娘で、ブラマンチョ監督作品での女性の描かれ方に異議を唱えており、とりわけ『ヒジャーブ』(2015年)を強く批判した。

ハヌムはガジャマダ大学卒業後にジャーナリストになっていたが、ガジャマダ大学講師で夫のランガがウィーン経済大学の博士課程で学ぶ奨学金を得ると、インドネシアでの仕事を辞めて夫に同行した。ウィーン滞在中の経験に着想を得た小説『ヨーロッパの空に輝く99の光』はハヌムとランガの経験がそのまま物語になったかのような設定になっている⁵⁾。映画版はグントウル・スハルヤント(Guntur Soeharjanto)監督によって2013年に制作された。

映画版『ヨーロッパの空に輝く99の光』で、ジャカルタでレポーターをしていたハヌムは、ウィーン大学の博士課程で学ぶ奨学金を得た夫ランガと一緒にオーストリアで暮らしている。夫婦に子どもはいない。夫が大学で研究している間、決まった仕事がないハヌムはカメラを持って街に出て人々の様子を観察している。何か仕事をしたいが、ドイツ語ができないと雇ってもらいにくいと、ハヌムはドイツ語教室に通う。

大学でのランガは、パキスタン出身でイスラム教の教えを守ることによりかなり重きを置くカーン、ビール好きの無宗教者で金儲けが一番大事だと考えるステファン、どの宗教の個別の事情も考慮しないことで問題解決を図ろうとするおせっかい気味のマルジャとともに、ときには口論をしながら、自分と信仰の関りについて理解を深めていく。

ステファンは宗教に対してシニカルで、ランガたちが豚肉を食べないことや断食することや礼拝するこ

5)『ヨーロッパの空に輝く99の光2』のエンドロールには物語のモデルとなった人たちが顔写真入りで登場してその後の様子が紹介されており、『ヨーロッパの空に輝く99の光』の物語は名前を含めて多くの部分が実際の出来事に基づいているようである。

とに対して素朴な質問を投げかける。イスラム教の神さまはこれをしろあれをするなど規則にうるさいと言うステファンに対し、ステファンが毎月80ユーロの保険金を払って万一の事態に備えているのと同じで、神さまの教えに日々従うことで最終的に神さまに全てを保証してもらえるのだと説明する。ステファンとの対話を通じて、イスラム教にあまり馴染みがない人でも理解できるように単純化させてイスラム教の考え方を伝えようとする。

カーンはイスラム教の教えは何よりも優先すべきだと考えている。ランガとカーンが大学の廊下で礼拝しようとする、マルジャは公共スペースでの宗教行為は認められていないと言い、宗教行為用の部屋に案内する。そこでは1つの部屋にさまざまな宗教行為が詰め込まれており、ランガたちは線香を立てて仏像を拝んでいる男性の隣で礼拝する。マルジャたちから見れば、この部屋を作ることで宗教行為を公共スペースから切り離すことと全ての宗教を対等に扱うことが同時に満たされているが、異教徒の宗教行為と隣り合わせで礼拝させられるのは自分の信仰に敬意が払われていないことだと考えるカーンは苛立ち、それに対してランガはヨーロッパでは寛容を学ぶことが大切だと言ってその状況を受け入れる。

期末試験の日程が発表されると、金曜礼拝と同じ時間帯なのでランガとカーンは困惑する。この試験を受けないと進級できないため、奨学金をもらっているランガは欠席できない。ステファンは君たちの神さまは金曜日しかいないのかとからかい、マルジャは自分も金曜日に他の用事があるからと言って3人をお願いすれば時間を変えてくれるかもしれないと持ち掛ける。ランガは教授に試験日について相談するが、信仰のために試験日を変えてほしいというランガの願いを教授は理解できない。試験当日、カーンはモスクで礼拝するために試験を欠席する。ランガは試験を受け、試験が終わってから最寄りのイスラムセンターに駆けつけて1人で礼拝する。カーンとの対比を通じて、非イスラム教徒とともに暮らす状況でまわりと折り合いをつけていくという信仰のあり方が示される。

ハヌムはドイツ語教室でトルコ系ムスリムのファトマ・バシャと出会う。ファトマは小学生の娘アイシャとともにベールを被っている。アイシャは学校で「イスラム教徒は悪者だ」と男子学生にいじめられ、先生からもベールを脱いだらどうかと言われるが、いじめられてもベールを脱ごうとしない。ベールを被らない

ハヌムは、なぜ被らないのかとアイシャに尋ねられ、今日は頭が痛いからと答える。

イスラム教のヨーロッパへの影響の歴史を調べているファトマの案内で、ハヌムは1683年のウィーン包囲の舞台となったカーレンベルクをはじめとするウィーン各地を訪れる。訪問する先々で、ファトマはイスラム教徒への敵意に愛情をもって応えるという態度を見せる。カフェで隣のテーブルの客たちがイスラム教徒を悪く言っていたのを聞いて怒鳴り込もうとするハヌムを抑えて、ファトマはレジでその客たちの食事代を払い、「食事を楽しんで イスラム教徒より」と書いたメモを残す。直接文句を言わないだけでなく食事代まで払うなんて理解できないとハヌムは言い、「右の頬を打たれたら左の頬も差し出せ」式のファトマのやり方に納得できないが、数日たってその客たちから感謝のメールが届き、敵意に愛情で応えることを学んでいく。

これより前、ハヌムがアパートでインドネシアから持ってきた塩漬け魚を料理していると、臭くて耐えられないので料理を止めろ、テレビの音もうるさいと隣家の男性が怒鳴り込んできて、ハヌムが憤慨するという出来事があった。カフェでの一件の後、ハヌムが塩漬け魚を使った料理を作って隣人に届けると、数日後に隣人がハヌムたちを訪れ、あの魚がおいしかったのでどこで手に入るのか教えてほしいと尋ねてくる。

ランガは教授に同行してフランスの学会に参加することになり、ハヌムも一緒にパリを訪れる。パリではファトマの紹介でマリオンに会う。イスラム教に改宗したフランス人女性マリオンは歴史研究者で、ルーヴル美術館で聖母マリアの肖像にアラビア文字が書かれている疑クーフィ様式の展示を紹介する。凱旋門の上からパリ市内を見渡して、シャンゼリゼ通り、オペリスク、ルーヴル美術館が一直線上に並んでおり、その直線をさらにずっと延ばしていくとメッカのカアバ神殿に至ることに気づかせ、イスラム教がヨーロッパ社会に大きな影響を及ぼしたことをさらに深く知りたければぜひコルドバを訪れるようにと助言する。マリオンと別れた後、ランガとハヌムはエッフェル塔に上る。日没の時刻になり、エッフェル塔の上から礼拝を呼び掛けるランガのアザーンがパリ市内に響き渡る。

ウィーンに戻ったハヌムは、マリオンから託された包みを渡そうとファトマを探す、ファトマと連絡が取れない。マリオンから預かった包みに入っていたの

は癌の治療薬だった。アイシャは癌に侵されていて、治療のために頭髮がすっかり抜け落ちていた。はじめはそれを隠すためにスカーフを被っていたが、しだいにスカーフを被ることを通じてイスラム教徒としての自覚が芽生えてきたという。イスラム教の歴史への関心を深めたハヌムがコルドバに行ってみたいという思いを強めたところで物語の幕が閉じる。

『ヨーロッパの空に輝く99の光』は、ステファンとの対比を通じて非イスラム教徒が理解可能な言葉遣いでイスラム教の教えを説明するとともに、カーンとの対比を通じて非イスラム教徒と隣り合わせで暮らす状況での信仰のあり方について、伝統主義的な考え方や態度ではない道を示そうとする。また、マルジャとの関係を通じて、信仰を含む全ての価値をフラットにして効率的に対応しようとする考え方との折り合いの付け方を示そうとする。これらが原作者ハヌム・ライスの父親が総裁を務めたムハマディヤがインドネシアで「近代主義」的なイスラム教の実践を目指す団体であることと密接に関わっていることは改めて指摘するまでもないだろう。『愛の章』ではファハリがエジプト人男性にコーランの章句をもって考えの足りなさを指摘し、イスラム教の教義の理解においてインドネシア人がアラブ人に引けを取らないことを示したのに対し、『ヨーロッパの空に輝く99の光』で特筆されるのは、インドネシア人が非イスラム教徒と「伝統主義」的イスラム教徒の双方に道を示しており、インドネシア国内に留まらずヨーロッパに（それを通じて世界に）伝えていることである。

『ヨーロッパの空に輝く99の光』が公開された翌年の2014年、同じ原作者と同じ監督によって続編の『ヨーロッパの空に輝く99の光2』が公開された。ハヌムとランガはコルドバを訪れる。かつてモスクだったメスキータ（コルドバの聖マリア大聖堂）ではハヌムが思わず跪拝して警備員に止められる。カフェで再会したこの警備員から、彼の祖先もイスラム教徒であり、規則なので跪拝を止めたのであって敵意はないと説明される。ハヌムたちはその警備員の飲食代を払ってカフェを後にする。

ハヌムとランガはインドネシアへの帰国前にイスタンブールを訪れる。ファトマと再会し、アヤソフィアなどを案内してもらう。アイシャは半年前に9歳で亡くなっていた。アイシャの墓の前でハヌムはジルバブを被る。

『ヨーロッパの空に輝く99の光』で非イスラム教徒

と「伝統主義」的イスラム教徒に道を示したランガたちにとって、次の課題はアメリカ人に対して道を示すことだった。2015年には舞台をアメリカに移した続編の『アメリカの空に浮かぶ割れた月』がグントゥル・スハルヤント監督によって映画化された。2001年9月10日にカブールと電話で連絡を取って小包を受け取り、9月11日に同時多発テロが起こったときにワールドトレードセンターにいて行方不明になった男性イスラム教徒はテロリストだったのかがミステリ仕立てで展開し、それを通じてイスラム教は暴力的な宗教なのかが検討される。2016年にはリザル・マントヴァニ監督により『アメリカの空に浮かぶ割れた月2』が映画化された。これはアメリカ大陸を最初に「発見」したのはコロンブスではなくイスラム教徒だったという歴史ミステリである。

6. 『愛の章2』——思考実験としての映画

2017年12月に公開された『愛の章2』は、原作はシラジ、プロデューサーはパンジャビで、『ヨーロッパに輝く99の光』のグントゥル・スハルヤントが監督をつとめた。

ファハリはスコットランドのエディンバラ大学の講師で、妻アイシャから引き継いだミニマーケットのビジネスでも成功し、経済的にも社会的にも安定した生活を営んでいる。トルコ系のフルシを運転手に雇い、インドネシアから訪ねてきた旧友のミスバを家に泊めている。

しかしファハリはずっと悩みを抱えていた。パレスチナで戦災孤児の支援活動を行っていたアイシャがイスラエル軍によるガザ空爆で行方不明になり、何年も連絡が途絶えていた。周囲の人たちはアイシャは死んだものと諦めてこれから前向きに生きた方がよいと言うが、ファハリはアイシャが生きていると疑わず、再会のための祈りを欠かさない。

ファハリが住むエリアにはさまざまな宗教の人が暮らしている。イスラム教とイスラム教徒に敵意を抱く人も多く、その敵意はしばしばファハリに向けられる。隣家のジェイソンからはサッカーボールをぶつけられ、その姉のケイラには声をかけても無視される。ファハリの車は毎晩のように何者かによってスプレーで「怪物」「悪魔」と落書きされる。ある夜、酒に酔って帰ってきて道端で寝てしまったブレンダを介抱すると、その様子を見ていたユダヤ教徒のカトリー

ナおばさんが、ファハリが妻でない女性と破廉恥な行為をしていたと罵る。

大学でも、講師のファハリに「イスラム教徒はテロリスト」「途上国出身」と心無い言葉を投げつける学生や、イスラム教は女性を抑圧しているのではないかと議論を吹っ掛けることで敵意をぶつける男子学生もいる。このときは教室にいた聡明な女子学生フルヤがファハリにかわってこの男子学生を言い負かした。

イスラム教やイスラム教徒への敵意が目に見える形で常に自分に向けられている状況で、ファハリは、「憎しむ気持ちを憎み、愛する気持ちを愛する」という考えのもと、自分に敵意を剥き出しにする人たちに対しても、その原因がほかにあるはずだと考えて助けの手を差し伸べようとする。ジェイソンとケイラはロンドンの爆弾事件で父を失い、ケイラはバイオリン、ジェイソンはサッカーが続けられなくなっていた。ファハリはジェイソンに自分が経営するミニマートの商品をいつでも好きなだけ代金を払わずに持って行ってかまわないと言い、バイオリンの講師を雇って匿名でケイラの家へ派遣してケイラのレッスンを続けさせる。カトリーナおばさんが1人でシナゴグに行くのを車で送り届ける。イスラエル軍を除隊になって戻ってきたカトリーナおばさんの息子が勝手に家を売ってしまい、カトリーナおばさんの住む場所がなくなると、ファハリはポケットマネーでカトリーナおばさんの家を買戻す。警察に追われていたムスリム女性サビナをかくまい、身分証明書などの書類をなくしたと聞くと、料理することと引き換えに家に住まわせることにして、弁護士のブレンダに頼んで正規の滞在許可の手続きをとろうとする。

ファハリの授業中に男子学生を言い負かしたフルヤは学生ではなく、ドイツから来たアイシャのいところだった。イギリスで勉強しようと大学選びをしていてファハリに出会い、ファハリに想いを寄せる。ファハリはアイシャとの再会を祈り続けているが、フルヤの積極性や、悲しみから逃避して自分の心に従おうとしないのは神さまに嘘をついているのと同じだというミスバの助言もあり、自分の気持ちに正直になったファハリはフルヤに求婚する。片膝をついたプロポーズといういかにも西洋風でインドネシアらしからぬ求婚を経て、ハリウッド映画のような豪華絢爛な婚礼を挙げる。

全ての人が祝福するなか、サビナだけ悲しそうな顔をしていた。サビナの正体はアイシャだった。ガザで

イスラエル軍に捕らえられ、女性捕虜を辱めていたイスラエル兵から貞操を守るため、牢獄の壁に自分の顔を擦りつけて大怪我をして、顔がすっかり変わっていた。顔を失ったので自分はアイシャではなくなったが、自分の幸せはファハリが幸せになることで、ファハリを近くで見守るつもりだったという。顔がすっかり変わってしまったことに加え、ベールを被っているで目しか見えなかったこともあって、ファハリも親戚たちも誰もアイシャに気づかなかった。

結婚後、妊娠したフルヤを伴って車で外出中、立ち寄った店でエジプト人とすれ違う。この人物は、『愛の章』でマリアの証言で投獄されていた男で、出所してファハリへの恨みを晴らすためにイギリスに来ていた。男に気づいたサビナと男が揉みあいになり、巻き込まれてフルヤが胸をナイフで刺される。搬送先の病院で、サビナがアイシャだと知ったフルヤが「アイシャ……」と言って手術室に運ばれていくのを見て、ファハリは初めてサビナがアイシャだと知り、なぜこれまで気が付かなかったのかと自分を責める。フルヤの手術が終わり、赤ちゃんのウマルは無事に生まれたが、フルヤは危険な状態で助かる見込みはほとんどない。フルヤはサビナに「お願いしたことは必ず実行して」と言い残して息を引き取る。「お願い」とはウマルの世話かと思いきや、それだけではなかった。この物語世界では最新の医療技術で顔面の移植が可能であり、フルヤは死んだ後に自分の顔面をサビナに移植してほしいと頼んでいた。サビナは顔面の怪我を気にしなくてよくなるし、ウマルは自分の本当の母親の顔を忘れずに済む。顔面の移植手術を行い、ファハリと、フルヤの顔をしたサビナ（実際はアイシャ）と、ウマルの3人の姿で幕を閉じる。

『愛の章』以来のイスラム恋愛映画で中心的なテーマだった一夫多妻は、『愛の章2』ではほとんど問題となっていない。ジルバブ・トラベラーものがテーマとしてきた西洋とイスラム教という二分法やイスラム教と暴力(テロ)を結び付ける考え方への向き合い方は『愛の章2』でも取り上げられているが、それも中心的なテーマだとは言えない。中心的なテーマは、『望まれない天国』とも共通して、幼い子を残して亡くなる母親の願いである。

興味深いことに、イギリスが舞台であるにもかかわらず、この作品からはインドネシアらしさが強く感じられる。カトリーナおばさんをシナゴグまで車で送ろうとしたときにフルシが消極的な態度を見せたこ

とをファハリは咎め、自分はシオニズムには反対だが、ユダヤ人はシオニズムと区別して愛すべきだと論ず。ファハリらが住む地区にはイスラム教徒だけでなくユダヤ教徒もカトリック信徒も他のキリスト教徒も暮らしており、その多様性がインドネシアと同じであるためにアイシャはこの地区に住むことを提案したという。しかしここにはパンチャシラ（インドネシアの建国5原則）がないからインドネシアと違うとフルシに言われると、ファハリはパンチャシラは自分たち1人1人の心の中にあり、自分たちが行くところならどこにでもパンチャシラはあると答える。パンチャシラに象徴されるインドネシアの「多様性の中の統一」は配役にも表れており、ユダヤ教徒のカトリナおばさんもトルコ系のフルシも、どれもインドネシア人の俳優が演じている。

むすび——引き継がれる母性、なくならない資産

冒頭で書いた『愛の章2』の違和感について、『愛の章』以来のイスラム恋愛映画の競合という観点から考えてみたい。

家庭に関しては、一夫多妻のテーマが後退していき、それにかわって子を思う母の願いが前面に出てきた。『望まれざる天国2』で、アリニは婚約者がいるメイに自分の夫の妻になって自分の子どもを育ててほしいと願う。構造としては『望まれざる天国』でメイが自分の子をアリニたちに託して去っていったことの「お返し」だが、この作品から伝わるのは個人的な貸し借りの関係ではなく、幼い子を残して死にゆく母の願いは何よりも優先されてしかるべきだという考え方である。この考え方を突き詰めると、自分の死後に他の女性に夫の妻になって自分の子を育ててほしいという願いだけでなく、自分の顔を移植して自分の代わりに夫の妻そして子どもの母になってほしいという願いになる。妻は1人だがそこには2人の妻(母)が重なって存在しており、一夫多妻にかえて母の願いをテーマとした結果として、奇妙な形で「一夫多妻」の状況が続くことになった。

インドネシアからイスラム世界への発信は、『愛の章』でインドネシア人学生のファハリがコーランの章句を引用してエジプト人をたしなめて以来、イスラム恋愛映画においてさまざまな形で試みられてきた。とりわけ舞台を外国におくジルバブ・トラベラーものでは、イスラム教またはイスラム教徒に向けられた敵意

に関して、敵意に愛情で応えるという対応が試みられた。『ヨーロッパの空に輝く99の光』でファトマが見せた自分たちに敵意を持っている人の食事代を払うという方法を、はじめこれに懐疑的だったハヌムも次第に受け入れていく。ただし、価値が多様な社会で「愛情で応える」を実践するのは容易ではない。相手の食事代を払うというのは、文化的背景が異なってもわかりやすい「愛情で応える」方法だろう。『ヨーロッパの空に輝く99の光2』で教会での跪拝を制止した警備員にカフェで再会したとき、敵意が向けられていたわけではないが、ハヌムたちが警備員の飲食費を払ったことも、「敵意に愛情で応える」の延長上で理解できる。この考え方を突き詰めると、イスラム教またはイスラム教徒に対する敵意を自分に向けてきた相手に対しては、どれだけ経費がかかろうとも金銭的な負担を肩代わりすることで解決しようとする『愛の章2』のファハリの態度に至る。

真面目さを突き詰めたところに滑稽さが生まれる。『愛の章2』の荒唐無稽にも見える物語は、今日の世界でイスラム教およびイスラム教徒に不審の目に向けられていることを理解した上で、そのことを解消するために世界に働きかけようとする思いから生まれてくるものであり、時代ごとに世界の課題を背負って正面から解決しようとしてきたインドネシアの真面目さをよく表している。

参考文献

- 上野太郎 2006 「映画が描くジャカルタの人間模様」『アジア遊学90』(ジャカルタのいまを読む)、勉誠出版、pp.177-186。
- 友成純一 2017a 「一夫多妻映画にみるモスレムの暮らし」『トーキングヘッズ叢書』、No.71、アトリエサード、pp.180-184。
- 友成純一 2017b 「インドネシア映画に描かれた欧米のモスレムたち」『トーキングヘッズ叢書』、No.72、アトリエサード、pp.176-179。
- 友成純一 2018 「モスレム学校は、青春の縮図」『トーキングヘッズ叢書』、No.73、アトリエサード、pp.174-178。
- 西芳実 2013 「信仰と共生：バリ島爆発テロ事件以降のインドネシアの自画像」『地域研究』(特集：混成アジア映画の海)、第13巻第2号、pp.176-200。

野中葉 2013「イスラーム的価値の大衆化：書籍と映画に見るイスラーム的小説の台頭」倉沢愛子編著『消費するインドネシア』慶應義塾大学出版会、pp.269-290。

松野明久 1995「インドネシア映画の物語世界」松野明久『インドネシアのポピュラー・カルチャー』めこん、pp.83-103。

見市建 2014「新たな宗教市場と政治」見市建『新興大国インドネシアの宗教市場と政治』NTT出版、pp.139-162。

福島亜里沙 2008「イスラーム的愛のブームを巻き起こした『Ayat Ayat Cinta(愛の節)』」『インドネシア・ニュースレター』、65、pp.48-57。

Brenner, Suzanne. 2011. “Holy Matrimony?: The Print Politics of Polygamy in Indonesia”. Andrew N. Weintraub. (ed.). *Islam and Popular Culture in Indonesia and Malaysia*. Routledge. pp.212-234.

Hanan, David. 2017. *Cultural Specificity in Indonesian Film: Diversity in Unity*. Palgrave Macmillan.

Haryadi, Rohmat. 2008. *Saat Bioskop Jadi Majelis Taklim: Sihir Film Ayat-Ayat Cinta*. Hikmah.

Heryanto, Ariel. (ed.). 2008. *Popular Culture in Indonesia: Fluid Identities in Post-Authoritarian Politics*. Routledge.

Heryanto, Ariel. 2011. “Upgraded Piety and Pleasure: The New Middle Class and Islam in Indonesian Popular Culture”. Andrew N. Weintraub. (ed.). *Islam and Popular Culture in Indonesia and Malaysia*. Routledge. pp.60-82.

Heryanto, Ariel. 2014. *Identity and Pleasure: The Politics of Indonesian Screen Culture*. NUS Press.

Izharuddin, Alicia. 2017. *Gender and Islam in Indonesian Cinema*. Palgrave Macmillan.

Mohd. Zariat Abdul Rani. 2012. “Islam, Romance and Popular Taste in Indonesia: A Textual Analysis of Ayat Ayat Cinta by Habiburrahman El-Shirazy and Syahadat Cinta by Taufiqurrahman Al-Azizy”. *Indonesia and the Malay World*. 40(116). pp.59-73.

映画

凡例：邦題 ①原題、②監督、③インドネシアでの公開年月、④その他

『愛が祝福されるとき』①Ketika Cinta Bertasbih、②ハエルル・ウマム (Chaerul Umam)、③2009年6月。

『愛が祝福されるとき2』①Ketika Cinta Bertasbih 2、②ハエルル・ウマム、③2009年9月。

『愛の章』①Ayat-Ayat Cinta、②ハヌン・ブラマンチョ (Hanung Bramantyo)、③2008年2月。

『愛の章2』①Ayat-Ayat Cinta 2、②グントウル・スハルヤント (Guntur Soeharjanto)、③2017年12月。

『アサラムアライクム 北京』①Assalamualaikum, Beijing!、②グントウル・スハルヤント、③2014年12月、④2015年第7回沖縄国際映画祭。

『アメリカの空に浮かぶ割れた月』①Bulan Terbelah di Langit Amerika、②リザル・マントヴァニ (Rizal Mantovani)、③2015年12月。

『アメリカの空に浮かぶ割れた月2』①Bulan Terbelah di Langit Amerika 2、②リザル・マントヴァニ、③2016年12月。

『ガレージ』①Garasi、②アグン・セントサ (Agung Sentaue)、③2006年1月、④2006年第19回東京国際映画祭。

『ターバンを巻いた女』①Perempuan Berkalung Sorban、②ハヌン・ブラマンチョ、③2009年1月。

『虹の兵士たち』①Laskar Pelangi、②リリ・リザ (Riri Riza)、③2008年9月、④2012年第25回東京国際映画祭。

『望まれざる天国』①Surga yang Tak Dirindukan、②クンツ・アグス (Kuntz Agus)、③2015年7月。

『望まれざる天国2』①Surga yang Tak Dirindukan 2、②ハヌン・ブラマンチョ、③2017年2月。

『ヒジャーブ』①Hijab、②ハヌン・ブラマンチョ、③2015年1月。

『ヨーロッパの空に輝く99の光』①99 Cahaya di Langit Eropa、②グントウル・スハルヤント、③2013年11月。

『ヨーロッパの空に輝く99の光2』①99 Cahaya di Langit Eropa 2、②グントウル・スハルヤント、③2014年3月。